



ひらり、夜が閃いた。とっぴりと深い、吸い込まれそうな濃い藍の色。
或いは、漆黒。

…スポーツ倶楽部のフロントだ。
一瞬の眩暈のようなその深い闇に沈んだ僕は、ぱちぱちと、目を瞬いた。

浮上。

日曜の午後、柔らかな5月の晴れた日差し。
中央線の駅近く、迷路のようなビル街の一角。いつもの場所。

受付の女の子の手が、ぼんやり差し出していた僕のカードをてきぱきと処理している。

そうだ、その指先に、吸い込まれそうにとろりと濃い夜が塗られていたのである。

「あっ…どうも。」

てきぱきでつるつるな彼女の笑顔に見送られ、僕はこめかみをたたきながら、更衣室フロアに向かうエレベーターに乗り込んだ。

一体、どうして爪の中に、宇宙なんかが塗られているんだ？！

細長くそびえるビルの、8階フロアのプール。淡々と25mを泳いでいる間、どうしても、目の前から離れなかった。

指先でひらひらと飛ぶ、蝶々のような宇宙。

細長くそびえるビルの、8階フロアのプール。淡々と25mを泳いでいる間、どうしても、目の前から離れなかった。

指先でひらひらと飛ぶ、蝶々のような宇宙。

あれは確かに、紛れもなく、無限の宇宙だった。ほのかに輝く星屑さえ浮かんでいた。

水の中、水の音。

ひっそりと街の隅っこ、コンクリートのビルに囲まれて空中に浮かぶ水色のプールの中。強化ガラスの向こうから、日曜の午後の金色の太陽、ゆらゆら明るい水色の光の網の目が伸び縮みする。

規則正しい平泳ぎとクロール、息を吸い、息を吐く。
壁に着く、ターンする。筋肉の動き、世界はそれだけ。

重力から解き放たれた灰色の脳細胞が、整然とした世界を、勝手に改造し始める。
水色と宇宙のイメージの揺らめく中で、さまざまなわかっていたはずのことが、たちまち「わからないこと」に変容してしまう。流体力学。かたちあるものはたちまち崩れていく。

一体僕は、今、本当はどこにいるのか、とか、あの空の向こう側は、小学校の水色のプール、8月の記憶の彼方なんじゃないか、それとも、マゼラン星雲の渦巻く濃い闇の宇宙なのか、とか。…あるいは、それは、胎内に浮かんでいたときの記憶の向こう側なのか。

水に潜り泳ぎつづける身体感覚は、普段意識しない脳内記憶を浮上させ、僕を少し別の論理のある多様な世界の束に近づける。

いつもと同じだけ泳いだと思う。僕の身体は習慣のままにプールから上がった。

宇宙と金色の水のヴィジョンで、すっかり時空がずれてしまったようだった。日曜の現実のシャワーを浴び、乾いた新しいシャツを着ても、ずれた身体はもうなおらない。

チェックアウトのためにまたフロントに行ったら、星空の指をもった女の子は、いなかった。

けれど、次の月曜の朝。僕は愕然とした。

いつもの通勤電車の中、ふと見回せば、たくさんの女の子の爪が、みんな宇宙のような夜のような深い闇の色だったのだ。あるいは女の子の間で夜の爪が流行しているのに、僕が気がついていなかっただけかもしれない。

電車の中、隣の席の女の子、向かいの席の女性。

…皆、さまざまな夜の色で指先を染めている。

闇夜、月夜、星空。極彩色の星雲が浮かんでいるような華やかなものもある。

向かいの座席に並んだ女の子たちの爪を順繰りに眺めていたら、それらが、夕焼け空や朝日の空、時刻によって、刻々と爪の中の空が色を変えてゆくのではないかという思いにとらわれた。

だが、さまざまな意匠を凝らした宇宙や空のモチーフはあっても、不思議にそれらは皆、一様に夜空なのだった。金色の朝焼けでも、珊瑚の夕焼けでも、春のパステルのような、青空の色でもなく。

大体、女性の爪というものは、ギリシャ神話の時代から、桜貝のような淡いピンクに染めるものだと思っていた。僕の母は、そうだった。そうして、真っ赤なマニキュアは、夜の街の女性がつけるもの。

一日を終え、夜のデートの後そんな話をしたら、彼女は笑った。

「あなたらしいわね。一体いつの時代の話？ ネイルアートって言って、女の子の爪は、自由自在なアートキャンパスなのよ。今は、宇宙テーマの爪が流行なの。キラキラした星屑入りとか、闇夜タイプとか、いろいろあるんだから。星雲入りや、三日月、太陽のモチーフが入ったものもあるのよ。」

そうして、意味ありげな微笑みを浮かべた。
「…本当はね、男の人には見せるものじゃないんだけど、」

思わせぶりに言うと、ベッドから起き上がった。

きちんと整頓された、彼女の部屋だ。
彼女は、枕元のランプを灯し、ベッドの横のドレッサーから、小さな物を取り出した。

そっとさしだすようにして僕に見せてくれたのは、こっくりとした闇夜の詰まったガラス瓶。

「新月の夜のエクストラクト。上等なのよ。どんな染料を使って、どんな模様を描くかで、これの性質と価値が決まってくるの。」と彼女は言った。

「だから、ものすごく大切なもの。塗り方だって、結構、神経使うのよ。」
そう言って、見せてくれた指先は、やっぱり、黒、というのではない、不思議な深みをもった闇に、ひそやかな輝きを秘めた、宇宙、なのであった。

そうだ…吸い込まれるような深み。

ゆらり。その爪の中の宇宙が視界にクローズアップされたかと思うと、僕はくらりと反転した。

とろりとした、濃度の濃い闇夜だった。
突然、ぽかりと宇宙空間に放り出されたような、真っ暗闇。

本当の闇の中では、自分の身体が存在すら不確かになる。
五感すらあるのかないのか確かめようもない。

底なしの虚無に飲みこまれそうになって狼狽する僕の隣には、しかしやがて彼女がいた。

それは、五感以前の感覚だった。
力強い、楽しげなミツバチのハミングのような、その波動を僕は感じた。
そして波動は有限のかたちへとその存在感を変容させる。

「さあ、行きましょ。」

「え、どこへ行くんだい。」

「だって、知りたいんでしょ。私たちの、この爪のこと。」

彼女は、手のひらをひらひらとかえしてのんびりとした口調でしゃべる。甘い甘い、そのハチミツ・ヴォイス。

その声を聞いていると、ゆっくりと身体感覚が戻ってきた。足を受け止める大地の安心感と。

僕たちは、こんな風に無と闇夜から始まり、ゆらぐような意識、それから大地を得た。
ふと、聖書の世界の創造七日間、という考えが頭をよぎる。

(すべては、彼女の掌の上。)

そして、光は、やっぱり彼女の爪からやってくるのだ。
「こっちよ。ほら、道が見える。」

彼女の、闇夜だったはずの指先は、いまや桜貝のようなほのかな桃色に染まり、ぼんやりと光を放って辺りを明るませていた。

指さしたその指先の灯が、ふわりと浮かび、分裂する。
桃色からエメラルド・グリーンに色を変え、蛍のように明滅しだす。

ああ、世の常識など、もうどうでもいいと思える。めくるめく彼女の宇宙の、その展開の造形美。

ふわりふわりと、その灯りは、虚空に水脈を残しながら天空の方向に道筋を示しだす。二列に分かれ、ゆるりと虚空に道をつくる。

夜間飛行の、道筋を照らし出す。

僕たちは、黙ってその道へと足を踏み出した。
闇が柔らかなガラスのように固まって、足を支える。静かなエメラルドの街灯に照らされた夜の国道をゆくようだ。

そして、水音。

…水音？

そうだ、さらさらと流れるその音は、細かな細かな光の粒子が、川のようになってさざめき流れる音だった。

「満月や三日月、お月さまを塗った爪だったら、月明かりの道がレモンドロップスみたいに溶けて流れて、とっても華やかなんだけどね、これくらい寂しげな方が、私は好きなの。」

歌うように、彼女は囁く。

「それに、今夜は、新しいブレスレットが欲しいと思ってたの。星屑のブレスレットには、月明かりは強すぎて、よくないもの。」

ブレスレット？

…僕は黙ってついてゆく。

いつの間にか、夜は足元に凝って固形となり、僕らはステーションのような広場にいた。ぼんやりと灯りが灯り、モザイクを描きながらステンドグラスのように鈍く柔らかく明るむタイルが敷かれている。

広場から細い裏通りに入り込む角に、星が指輪になったデザインの看板がぶら下がっていた。（ゆらゆら揺れる看板は、確かにちらちらと星屑の輝き。）

「ほら、あそこよ。」

僕らは古いくたびれた木造の扉の前に立つ。

「なんだい、こないだの星粒みんな粉薬にして飲んじゃったのかい。」

「そうだよ、とびきりいい夢みられるんだ、夕食後にひと匙ずつ、オブラートに包んで、きらきらごっくん。」

「あれは高価だし、強力なんだ。飲み過ぎると身体壊してしまうぞ。髪の毛の先から、星屑が噴き出てきて、身体が鉱物化してしまうことだってある。しばらく我慢しろよ。」

扉の横の部屋、胡桃色の灯りのともった窓に二つの影が動いていた。

彼女は構わず呼び鈴を鳴らす。
きらきらと、光が降る。リリン、と鈴をふる音。

「おや、お客さんだよ。」

笑いながら、歌うようにひとつの影がそう言った。

ドアが開く。
「いらっしゃい…やあ、あんたか。」
「あんたか、はないでしょう、お得意さんに向かって。」

玄関に出てきたのは、奇妙な頭巾をかぶった小男だった。
ピエロのようなひだ飾りのついた派手な部屋着とナイトキャップ。

「ブレスレットが欲しいの。なるべく不揃いの星屑で、複雑でフラクタル、微妙な光のグラデーション、でも、あんまりきらびやかにはしないで。わかるでしょ、私の好きな感じ。」

「そういうのは割と高くつくんだよ。」
「これ一枚じゃできない？」

ピエロおやじは目をすがめ、わざとらしいため息をついてみせる。

「何だってそれにふさわしい代償ってのが必要なんだよ。」
彼女もため息をついた。

「わかったわよ。ほら、これ。もう1枚あれば十分でしょ。」

そいつは、ちょっとずるそうに眉をしかめ、かつて彼女の爪を灯していたものだったひかるものを受け取った。

「フン。少し足らんようだが、あんたお得意さんだからな、これでおまけしとくよ。」

そいつは、細い銀色の釣竿を群青の闇に投げた。
竿の先から噴き出した、きらきらと光る細い光が宙に踊ったかと思うと、それはふわりと網状に広がった。

猟師が回遊魚を捕る網みたいだ。

引き上げた網には、砕けた星屑のかけらが無数にひっかかっていた。銀を帯びた光を放ち、ちかちかと煌く、こまかな光のさんざめき。

「一網打尽、とな。」

にやりと口の端を持ち上げて、彼はくるくると網を巻き取り、ついでに自分もおどけた仕草で、くるりとまわって見せた。

「宇宙の星屑と地上の街灯り特製ブレンド極上品、1000万ドル×100万ドル、お買い得だ、たったの2枚だ。」

彼女はフンと鼻を鳴らし、たっぴりと優美な仕草で、彼に腕を差し出してみせる。
「ブレスレットよ。強い色はあまり入れないで。さ、巻いてちょうだい。」

彼は僕にちょっと目配せし、肩をすくめるような動作をしてから、大仰にため息をついてみせた。
そして、ポケットから小さな笛を取りだして吹き始める。

眼前の風景が一枚、くるりとめくれた、ような気がした。

その小さな銀色の笛から繊細な美しい音色がきらきらと吹き上がり、世界を満たしてゆく。細かく細かく震え、瞬く光と微風のような、静かなメロディ。懐かしいような、切ないような光が胸の奥に揺れているような気持ちだった。ピエロ親父が創りだしているとは到底思えない、その透き通った音色。

笛の音にあわせ、世界が静かに振動し、歌いだす。あたりいちめん張りめぐらされた無数の細い金の糸が一斉にきらめき出すような、旋律。

ぴくり、と彼の竿に巻き付けられた網が身動きした。

星屑を朝露の雫のようにまとった光の網は、輝くメロディにそっと寄り添うように共鳴し、ふるふると震えだした。そして、そのまとった光の雫がはらはらと落ち、細かくしぶきをあげ、ゆるやかなリズムを追って、踊り出す。

音楽そのもののよう、質量を持たず、ただきらきらと震えながら、大小の輝きを放ちながら。

その光の粒子はあたり一面をさまざまの銀色に染め、世界の音楽をダンスへと変容させた。

「忘れないで、ブレスレットなの。ネックレスじゃないんだから、調子に乗ってあんまり長くしすぎないで頂戴。」

わかってる、というように、ちょっと眉をあげてみせ、彼は笛を続けた。
(けれど、やはり、ちゃんと少し調子は落とされていた。)

光の雫は、はしゃいだ動きを少し弱め、粒立だちながら、緩やかに繋がりあい始める。きらきら、が、しゃらしゃら、という静かな質感へと変わってゆく転調の瞬間があり、心と彼女を見やると、彼女はぼうとした光に包まれていた。

光たちは小さな天の川のように彼女の腕に滑り込み、渦巻いた。

しゃらしゃらと鳴りながら、それが次第に繊細なブレスレットへと変容していく様子を、微光に淡く照らし出されながら、僕らは息をのむようにしてただ見とれていた。

ほんとうに素敵なブレスレットだった。

あんな風に、この世のあえかなさんざめき、輝きを集めて身に付けるってどんな気持ちだろう。いつでもこんな世界を心の中に感じてられるってこと？

…なんて素晴らしいんだろう。

でもこういうのは、たとえば僕なんかではダメなんだ。だって、彼女に似合うようにできている。似合うっていうのは、星の輝きの方から主人として選ばれてるってことなんだよ、きっと。

「少しね、」
心持ちうっとりとした光を眼に浮かべ、彼女は言う。
「ぴりぴりって来るの。ごく弱い電気を感じるような。」
「とっても素敵なのよ。」

ちらちらと瞬く星くずのエレキテル。僕は少しだけ羨んだ。

「さあ、そろそろ帰りましょ。」
新しいブレスレットを満足そうに眺め、上機嫌の彼女が言う。

うん、名残惜しいようだけど、明日があるからね、と僕はぼんやり答えた、ようだった。

(僕はどうもそのときのことがあんまりはっきりとは思いだせないのだ。)

「どうやって帰りましょうか。いろいろやり方はあるんだけど。」
「どんな？」
「あのお店に行きましょ。」

毎度、と愛想よくウインクして見せる店主に別れを告げ、アクセサリーの店を出たところで彼女が指差したのは、通りの角地、小さなBARの看板。

からん、とドアベルを鳴らしてドアを開けたら、カウンターの向こう側のバーテンダーは、つぶらな瞳をしたニワトリだった。翼を器用に使った粹な動作でシェーカーを振りながら、愛想のいいウインクで迎えてくれる。

「いらっしやいませ、お二人さん。今宵は何になさいますか？丁度、素敵な流れ星ボトルが一本入ってきたとこですよ。」

「あら、タルホ社のじゃない！シューティンスター専門ブランドだからひと味ちがうのよね、私好きなの、それ。」

「じゃあお二人に当店自慢のとびっきりの流れ星カクテルおつくりしましょう。流れ星のふりそそぐ中、きらきら飛び回るような素敵なダンスパーティの夢が見られますよ。」

「ああ、凄く魅力的だけど…」

彼女は残念そうに微笑んでこう言った。

「もう今夜は長く居すぎてるのよ。彼はここが初めてだから、帰り道用のカクテルにしてもらえる？」

「そうですか。承知しました。何かリクエストはございますか？」

「そうねえ…」

彼女は蚊帳の外でぼやっとしていた僕を振り返って微笑んだ。

「疲れた？あっという間に帰れる道の方がいいかしら？」

「他にどんな帰り方ができるんだい？」

「いろんな帰り道があるのよ。カクテルの配合でね。」

「僕は大丈夫だよ、キミに任せる。別にもうちょっと遊んで行ってもいいんだけどな。」

彼女はにっこりと微笑んだ。

「ダメ、それが危ないの。溺れちゃうのよ。あっちに帰れなくなってしまうの。」

溺れる？

「…うん、任せるよ。」

「じゃあ、一瞬のうちにスパークして流れちゃうような、強いショート・カクテルはやめときましょ。刺激も強すぎるしね。ほうき星のきらきらスパークを少し優しくやわらげてくれる十六夜のムーンライトブレンドしたロング・カクテルタイプ。でも、くれぐれもあんまり長くはなりすぎないようにして頂戴。」

「承知しました。…ムッシュ、こちらが初めてなんでしたら、サービスで木星の卵の小さいの付けられますよ。」

「アラっ、ずるいわ、彼だけ?!」

「あいすいません、今夜はひとつしかないので、初めての方には特別サービスを、というのが決まりです。…第一お客さんにはこないだ金星のをサービスしたばかりじゃないですか。」

「そういえば、そうよね。あれ、とびきり素敵だったわ、マスター。」

「当店自慢のスターエッグですからね。女性には特に金星がオススメなんです。アフロディッテ・パワーのコロイド溶液みたいな上等のカクテルになりますからね。」

マスターは如才なく話しながら、優雅に作業を始めた。

すらりと背の高いシルエットに、トサカの色に合わせた小粋な蝶ネクタイ。濃い夜空の色のよう
でいて、角度によって虹色に輝く不思議な色。

ダンディなニワトリ・マスターの動きは、そのまんまパントマイムのようなパフォーマンス。流
れるような芸術だ。無駄のないスマートな仕草でボトルやシェーカーを操る。軽快な音楽が聞こ
えてきそうだと、思ったら、本当に聞こえてきた。

軽快でいて静けさと落ち着きのある、不思議な店のBGM。
僕は、それは伊勢の隅に隠されたスピーカーなどからではなく、マスターの動きから生まれてき
た音楽であることを怪しんだ。

軽く快い音をたててシェーカーを振る。流れる音楽と一体化した一連のその動きにうっとり
と見ほれているうちに、みるみる出来上がったカクテルを、彼は透き通った細長いグラスに注ぎい
れる。

柔らかな朝の光のように軽く踊り泡立つ飲み物。すぎとおった淡いエメラルド・グリーンの中
では、こまかに明滅する極彩色の火花が散っていた。

「じゃあ、星卵入れますね。刺激的な火星卵なんかを好む御仁もおられますが、やっぱりあれは
戦争の神マルス、いささか剣呑なところに連れてかれたりしますからね、やっぱり木星が一番で
すよ。」

最後のメロディ、絶妙のリズムのアクセントに、こきん、と小さな音を立てて、彼は小さな卵を
片手で割り入れた。

鶉の卵ほどの、暗緑色に薄青いブルーの班の卵の殻は、半透明の鉱石のような鈍い輝きをもっ
ていた。

「殻はお土産に差し上げますよ。」

卵の中身は、とろけたマグマのような輝きを放ちながらグラスの海に沈んでいった。

「ベースはアンドロメダ。軽くステアしてお好みの混ざり具合でどうぞ。完全に混ぜてしま
うより、少し口当たりに変化があるマーブル模様で止めておくのがおすすめです。」

マグマは輝きながら、液体の中で多数の小噴火を起こして沈んでいった。

僕は宮澤賢治の童話「貝の火」を思い出した。激しく美しく燃える輝きの宇宙の宝玉。

あれは単純な道徳訓話がどこかでズレていったような、善悪を越えた不可思議で残酷な物語だった。この世ならぬ美しさ、彼岸のお話だったのだ。生命を魅了し平穏な暮らしを破壊するに至る痛ましく激しい美しさの宝玉。

「貝の火、みたいだね。」
「…ああ、そうね。ほんとうに。」

彼女の方に差し出されたグラスは、卵ナシ。聡明な水いろに、ほんのり桃色がかった水晶のような淡い光が滲んでゆれた。

「うふふ、やっぱりマスターのは素晴らしいわ。卵ナシでも十分素敵な星雲がかかっている。」

かちん、と僕はグラスを合わせる。

マスターは黙ってグラスを磨いていたし、遠い星のさんざめきのような不思議な音楽は小さな店を静かに満たしていた。

「あのお話、嫌いになれないけど、…やっぱり、嫌いよ。どうしてホモイはあんなひどいめにあわなくちゃいけなかったのかしら。」

そして、なのにグラスを口元にもっていった瞬間にこんなことを言い出すから困ってしまう。

「ホモイは至極善良で素直な仔うさぎだったのに、正しく優しいお父さんとお母さんに大切に育てられていたのに、勇気を出して命を懸けてヒナを救ってあげたのに。そのお礼が騙され、まつりあげられたあげくの失明なのよ。」

「世界の、宇宙の、自然の。透明で純粋で抽象的な力や美しさや欲は、限られた個に所有されたとき、それが激しければ激しいだけそのほかの全てを損なう危険でもあるってことかな。恩寵でもあり劫罰でもある、パッション。」

「…そうね、玉を中心に考えてれば。確かあの玉は、ホモイがキツネに騙されて調子に乗って増長し、道を踏み外すぎりぎりのところで最も凄まじい生命の美しさに燃えていたんじゃないっけ。」

「そうそう、燃えるような戦争の炎のような激しい美しさと自然の美しさの相剋の中にダイナミックで劇的な美しさをもって輝いていたんだ。最初は、ただ静かに燃える炎と冷たく透き通る天の川のイメージだったのね。」

僕は、手元を眺めた。超新星の爆発、絶え間なく発生し続けるビッグ・バン、星雲渦巻き、燃えて溶け流れる溶岩が輝く流れのように噴出するきらめきがグラスの中にゆれていた。

世界の、始まりと、終わり。

彼女と僕はそのまま黙って、同時に各々のカクテルを口に含んだ。

艶やかな色彩と光がそのままくちびるからやわらかく流れ込み、身体を満たしてゆくのが見えるようだった。静かに燃える炎をそのまま飲みこむ、ふわりとした。

頭の中に、きらめくような宇宙が広がって、僕は、くらり。
僕の手足は存在感を失ったまま、その存在の記憶がイメージとなる。来た時のような不安はなかった。僕は僕のかたちを丁寧に思い出しながら、そのままかたちのない僕の中の色彩の渦の中を歩いてゆく。

そして、やはりその先に彼女の気配があった。

春の夕暮れどき、ふと振りかえり、微かに微笑んでくれた瞬間、いつかの記憶の中と同じその表情。乱れた髪を押さえた指先に、時空を切り裂くようにして、吸い込まれそうに眩しい闇夜が煌めいた。

地平線にちらちらと瞬く星明りのような街のイルミネーション。

ひらり。
彼女が手のひらを蝶々のようにひるがえすのが見えた、ような気がした。

…！

ああ！世界がひっくり返る！僕は、足元が崩れる感覚の眩暈におそわれた。眩暈の中、ブレスレットと夜空の爪と、世界じゅうの七色の星屑がきらきらとスパークする。

*** **

その夜の僕の記憶はそれでおしまい。
帰り道は、二人一緒、それなりにたくさんの方があったような気がするんだけど。

何しろ記憶が淡すぎる。夢の向こう側の世界のように、翌朝目覚めたら、いつものカーテン、朝陽と自分のベッド。

*** **

いつもと同じ、木曜日。街にはやっぱり爪に宇宙を塗った女の子たちがたくさん、金魚鉢の中の色とりどりの金魚みたいにひらひらと泳いでいた。

…いくら爪に色を塗っても、きっと僕ではダメなのだ。
自分の爪をちらりと眺めて、そう思った。

だって、気が知れない。女の子たちはのみんな、こんな風に、平気で電車の中なんかで、ひらひらと宇宙をもてあそぶのだ。指の先に、深い無限の闇と光を宿したまま、きらめく宇宙の神秘の輝きを細い腕に絡めたまま、そうして店を眺めたり、おしゃべりをしたり、貯金のことを考えたり、誰かの悪口を言ったりすることもできる。…アスファルトの上を、昼間を歩くことができるのだ。

「あら、あなただって、自分のことや世界のこと、真実なんて、別に何にも知らないくせに、毎日電車に乗ったりひげをそったりしてるじゃない。その手でね。」

…イヤ、そりゃ、話が違うな。僕はだまっていたけど、そう思ったよ。

だって、女の子たちは、自分の手をひらひらさせて、うっとり眺めながら、眺められているのも知っていながら、自在にそれを操れるんだから。まるで白い手袋の手品師みたいな手つきで、自分も宇宙も、平気でもてあそぶことができるんだから。

ぼくは、心の中で彼女らの真似をしてくすくすと笑った。
真実なんかわからない、だけど、ウイスキーグラスをゆすっては、「グラスの底に真理が見える。」なんて、訳知り顔をしたくなる。

今度は、彼女と、きらきら輝く流れ星の入ったカクテルを飲みに行こう。

指先の宇宙

<http://p.booklog.jp/book/79166>

著者 : yamamomon

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/yamamomon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/79166>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/79166>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ